

平成 22 年度バックエンド部会表彰

平成 22 年度のバックエンド部会表彰委員会は、推薦がありました下記の業績賞および奨励賞候補について審査し、それぞれ業績賞および奨励賞として表彰することを決定いたしました。なお、功績賞の推薦はありませんでした。

表彰は、通常春の総会会場で行われますが、昨春の年会は中止になりましたので、九州で開かれた秋の大会で行いました。同時に優秀講演賞に選ばれた 2 名の方の表彰も行いました。

業績賞 [1 名]

北海道大学大学院工学研究院エネルギー環境システム部門 原子力環境材料学研究室

受賞理由：当該研究室は、「放射性廃棄物地層処分に関する情報交換会」を長年継続して主催して来られ、多岐に亘る原子力バックエンド分野研究の活性化に大きく貢献していると高く評価される。同情報交換会でのプロの研究者の真剣な議論は、学生にとって貴重な経験となり、将来、原子力バックエンド研究を担う学生の教育の場としても大きな貢献をもたらしたと評価される。

奨励賞 [1 名]

玉村修司 殿 (幌延地圏環境研究所)

受賞理由：原子力バックエンド研究 (Vol.17, No.2) に掲載された総説「Loading Capacity (LC) 法を主とした地下水中の溶存有機物と放射性核種との錯形成能評価」は、核種の地下水中移行促進および遅延の検討において重要な有機物の寄与について、錯生成とそのモデルの観点から既往の成果をレビューし、その内容について著者らの考え方を加えており、有機物影響の研究に取り組む者の一助となるものと評価される。

優秀講演賞 [2 名]

奥村啓介 殿 (日本原子力研究開発機構)

受賞理由：原子力学会 2010 年春の年会の口頭発表「高レベル放射性廃液中の難分析長寿命核種のインベントリ評価に関する研究；(2)長寿命核種インベントリ評価のための新しいデータおよびコードの開発整備」において、論文、報告、質疑応答のパフォーマンスともに高い評価を受けた。

高橋宏明 殿 (日本原子力研究開発機構)

受賞理由：原子力学会 2010 年秋の大会の口頭発表「圧縮ベントナイト中の核種移行評価手法の高度化開発；(5)X 線ナノ CT による圧縮ベントナイトの内部微細構造解析」において、論文、報告、質疑応答のパフォーマンスともに高い評価を受けた。

平成 22 年度の表彰委員会は、運営委員が委員を兼ね以下の 15 名から構成されました。有効票数は事務局の 3 名を除く 12 票です。業績賞、奨励賞とも賛成 10 票を得て選考されました。

(委員長) 中山真一

(委員) 長崎晋也, 向井雅之, 藤崎淳, 大和田仁, 三倉通孝, 齋藤茂幸, 延藤遵, 細谷真一, 長岡亨, 稲垣八穂広, 金子悟

(事務局) 椋木敦, 立川博一, 仙波毅

奨励賞の玉村氏は、扱い方が依然として議論されている有機物の長期処分安全性への影響について最新の情報を体系的にとりまとめましたが、今後の研究方向に示唆を与えることが期待されます。今後バックエンド分野においては是非とも活躍していただきたい人材です。

このような若手研究員を次々と育てていくには、彼らに研究の魅力を伝え続け、これからの研究活動を「奨励」する役割をする者が必要です。その意味で、北海道大学原子力環境材料学研究室の業績賞獲得は至極妥当です。

優秀講演賞については昨年度に採点項目を入念に再検討し、それを部会ホームページ上に公開しました。発表者は、発表の何が評価対象になるのかを具体的に知ることが出来ます。

優秀講演賞もまた、奨励賞と同様に、受賞がゴールでなく、その後が大事です。ホームページには、「バックエンド部会では、このような評価活動を通じて、学会セッションにおける各講演の質的向上・講演者のスキル向上につながることを期待しております」とあります。自身の研究成果をよりよく皆に理解していただけるよう講演のスキルを向上させることが目的ですから、優秀講演の何が優秀なのかをフォローし部会員に伝えていくよう寄与されることを望みます。

平成 22 年度表彰委員会委員長
中山真一 (日本原子力研究開発機構)

平成 22 年度業績賞を受賞して

北海道大学大学院工学研究院
エネルギー環境システム部門
原子力環境材料学研究室
佐藤正知

小倉市で開催された 2011 年日本原子力学会秋の大会バックエンド部会総会の場で、表記の賞を受賞した。

北海道大学工学研究院の原子力環境材料学研究室が主催し、毎年全国から多くの参加者を得て、雪の残る 3 月の中旬に研究成果を披露し質問時間を長めにして活発な質疑を行う情報交換会を開催して来た。早いもので、この 3 月で 13 回を数えた。この研究会は研究室の前教授の大橋弘士先生の時にはじまり、その後を引き継いで研究室あげての行事として開催してきた。研究会を続けてきたことが評価されて受賞に至った訳で、受賞者は研究室である。

大学における教育研究活動では、学生と教員、学生と先輩や同僚や後輩学生の年単位での時間をかけた毎日の積み上げの中から成果が生まれる。学生の成果発表では、北海道内外から参加していただいたこの専門分野の先輩や大先輩から質問をいただいたり、コメントをいただいたりすると、はらはらどきどきであるとともに、場合によっては褒められたりすると嬉しくて心躍る状態になる。またそういう経験談が先輩学生から後輩学生へと伝わる。

研究室の教員である私どもにとっては、この情報交換会は、教育研究活動の一環としてなくてはならない行事になってしまった。ただただ、そうやって積み重ねているうちに業績賞をいただいた次第である。卒業生も現役の学生も、教職員も、皆でいただいたこの賞を、ともに目指している研究室の教育研究活動発展の励みとして受け止め、受賞を喜んでいる。



第1回放射性廃棄物地層処分に関する情報交換会
(1999年2月22日) 写真
(発表者：櫻木智史(現・原環センター))



第1回放射性廃棄物地層処分に関する情報交換会
(1999年2月22日) 懇親会写真
左から、大貫敏彦博士(現・原子力機構)、鈴木覚博士
(現・NUMO)、大橋弘士先生(現・北大名誉教授)

原子力バックエンド部会奨励賞を受賞して

幌延地圏環境研究所
玉村修司(たまむらしゅうじ)

このたび、「Loading Capacity (LC)法を主とした地下水中の溶存有機物と放射性核種の錯形成能評価」に対しまして、日本原子力学会バックエンド部会より荣誉ある「奨励賞」をいただき、大変光栄に存じますとともに、今後の活動の大きな励みとさせていただきます。御指導いただきました先生方や、御世話になりました皆様に厚くお礼申し上げます。

本論文は、地下水中の放射性核種の移行に及ぼす溶存有機物の影響について、既存の文献から得られた知見をまとめた総説であります。以下に、その執筆経緯などについて御報告させていただきます。

本総説は、産業技術総合研究所からの受託研究(文献調査)として、当時北海道大学に在籍されておられました長尾誠也先生に御指導いただきながら執筆して参りました。執筆に先立ち、産業技術総合研究所の鈴木庸平様からは、本文献調査が要請されている社会的背景を丁寧に教えていただき、執筆内容の基本方針を据えていただきました。

長尾先生には、執筆の当初より細部にわたる校閲を何度もいただき、私の最初の原稿に対して格段に良い内容へと改訂いただきました。産業技術総合研究所の渡部芳夫様には、読者の視点から欠けている重要な内容について御指摘いただき、総説を大幅に加筆させていただく機会をいただきました。

産業技術総合研究所の関陽児様には、お忙しいところ原稿を丁寧に校閲いただき、総説の質を高める大変有益なコメントをいただきました。

査読者の皆様には、丁寧な査読と貴重な御提言をいただき、総説の拡充と質の向上に大きく貢献いただきました。

また、博士過程の指導教官としてお世話になりました現北海道大学の佐藤努先生と研究室の皆様、北海道大学におけるポストク時にお世話になりました米田哲朗先生、金沢大学におけるポストク時に、長尾先生とともにお世話になりました山本政儀先生には、これまで有形・無形の力をいただき、執筆の大きな支えになっていただきました。

本総説を受賞の対象としていただいたのは、真に皆様や査読者の皆様、そして御世話になった多くの方々のお力によるものであります。本当にありがとうございました。

これからも研鑽を積み重ね、社会の発展に少しでも貢献させていただけるよう、励んで参りたいと思います。皆様方には御教示・御指導をお願いさせていただくことがあると思いますが、引き続きよろしく御願ひ致します。